広報かがみの 5
2023年5月号 第219号 毎月1日発行

シリーズ 第156回

鞍懸寅二郎

幕末期に津山藩で異色の存在を示した家老・鞍懸寅二郎は、鏡野町と深い縁があります。

寅二郎は、天保五年（一八三四）、播州赤穂（兵庫県赤穂市）の赤穂藩士の次男として生まれました。幼少から優秀であった寅二郎は、藩主にその才能を見出され二十四歳の若さで勘定奉行に抜擢され財政改革にあたりますが、安政五年（一八五八）反対派勢力の策謀によりわずか半年足らずでその職を追われ、失意のうちに赤穂藩を去ることになります。

その後、江戸に出て学問の修行に励みますが、万延二年（一八六一）正月、故郷に近い津山に移り、友人の縁者である津山藩士・河井達左衛門から西北条郡香々美中村（香々美）の大庄屋・中島多右衛門を紹介されます。中島多右衛門は、嘉永年間（一八四八～一八五四）から岡山藩や津山藩の学者を教師として招き、自身の屋敷地内で地域の子弟に学問を受けさせていたのですが、安政年間（一八五四～一八六〇）に有志を募って「休嫌学舎」という塾を設立していました。寅二郎は多右衛門の屋敷に住み込み、休嫌学舎の教師として地域の教育に携わることになります。

寅二郎は教師に就任すると、まず休嫌学舎の学則を定めました。「父は慈なり、子は孝なり、君は義、臣は忠、兄は友とし、弟は順い、夫婦の別、朋友の信、長幼の序、貴賤の礼は人の常道なり」で始まる儒教の教えに則った学則は全九条に及びました。

しかし、時代は寅二郎を在野の一教育者としては留め置かず、翌年五月には達左衛門の世話人として津山藩校の学問世話と講釈を命じられ、十月には正式に儒学者として召し抱えられました。さらに国事周旋掛に任命され京都に出立します。国事周旋掛とは、京都において朝廷や幕府、各藩の動向を探る任務ですが、政情不安だった幕末においては、的確な情勢を把握することが急務であったため、各藩とも優秀な人材を国事周旋掛として京都に派遣していました。寅二郎もこうした各藩の要人や志士達と意見を交わし、自身の思想にも大きな影響を受けたと思われます。

時勢が急転回する幕末期にあって、津山藩も勤皇（幕府を倒して新しい政権を作る）か佐幕（幕府に協力する）か揺れ動く中、勤皇思想に篤い寅二郎の藩内における立場も不安定で、時に要職を外されることもありましたが、明治維新後は新政府の下、津山藩を代表する権大参事に任命され、兼ねて政府の民部省へも出仕することとなり東京へと赴くのですが、廃藩置県後の明治四年（一八七一）八月十二日、津山へ帰省して知人宅を訪れた帰宅途中に暗殺されました。犯人は不明ですが、新政府による諸改革と新政府で異例の出世を遂げる寅二郎への反感を持つものの犯行だったと推定されています。

浮き沈みの激しい寅二郎の人生でしたが、「鞍懸先生年譜抄」によれば、不遇の時期に手を差し伸べた河合達左衛門と中島多右衛門は、津山藩に仕える前に最も好意を寄せた人物として、親族に等しい交流を行っていたと書かれており、中島家には多衛門や息子の勇次郎（後の中島衛）にあてられた手紙も残されています。

鞍懸寅二郎（左）と中島多右衛門（右）

休嫌学舎跡（香々美）

寅二郎の顕彰碑（津山市）

参考：『史料が語る 津山藩士 鞍懸寅二郎』『鏡野町史』『津山市史』「鞍懸先生年譜抄」

鏡野町教育委員会 生涯学習課 日下
電話（0868）54-7733

〒708-0392 岡山県苫田郡鏡野町竹田660 鏡野町くらし安全課 TEL0868-54-2780
【鏡野町のホームページアドレス】http://www.town.kagamino.lg.jp/